

一般社団法人 倫理研究所

今日の心がけ◆仕事を通じて人間力を高めましょう

Aさんは部署異動により、それまで経験のなかった業務に取り組む中で、思うように成果が出せない日々になり、戸惑いを感じていました。そこで勇気を出して先輩に相談すると、「思い通りにならない時こそ成長の機会だ。そんな時こそ課題と向き合うことが人を成長させる」と助言を受けました。この言葉をきっかけに、Aさんの考え方は大きく変わりました。目の前の課題から逃げず、一つひとつに真摯に向き合い、全力で取り組むようになったのです。その結果、できることが増え、仕事の楽しさとやりがいを感じるようになりました。その姿勢は周囲にも伝わり、信頼を得て数年後には課長へ昇進しました。京セラの創業者として知られる稲盛和夫氏は働くことは、「あらゆる試練を克服し、人生を好転させていく妙薬」であると説いています。仕事は単なる生計の手段ではなく、人を鍛え成長させ、人生をより良い方向へ導く力を持っています。働くことに真摯に向き合うことが、自らを磨き続ける機会となり、人生をより豊かで希望に満ちたものにしていくのです。

日本再発見! -秋冬の伝統行事・(日本編)-

スネカ (岩手県大船渡市三陸町)

大船渡市三陸町では、1月15日の小正月の夜になると、異形の者たち。が徘徊する。藁藁(わらみの)をまとい、俵を背負ってアワビの殻を腰にぶら下げた「スネカ」が家々を訪ねて回るのだ。その名は、囲炉裏に長いことあたるとできる

昼間の暑さが少し落ち着く頃、夕方になると、あちらこちらから虫の音が聞こえてきます。代表的な秋の虫といえば、鈴虫やコオロギでしょう。

窓の灯の草にうつるや虫の声(正岡子規)

この俳句に詠まれているように、私たち日本人は古くから虫の音を「声」として聴き、楽しむ感性を持っています。平安時代には、貴族が虫の声を鑑賞する「虫聞き」が行なわれ、和歌にも詠まれました。

ある研究によると、虫の音や自然の音を耳にすると、私たちはそれを言語を司る左脳で聴くとされます。聞こえてくる虫の音に感性的・情緒的な意味を見出して処理するのです。

一方、日本語を話さない人々にとって、虫の音は特別な意味を持ちません。そのため、「声」ではなく単なる雑音として聞こえるといっています。

街中では、人工の騒音に虫の音が消されるかもしれません。しかし時には、道端の草むらに響く虫の声に耳を澄ませ、秋を感じてみてはいかがでしょうかでしょう。

今日の心がけ◆虫の声に耳を澄ませてみましょう

怠け者の脛の火斑(ひがた)という意味の「スネカ」から。奇怪な格好は、怠け者の象徴なのだという。怠け者や泣く子を戒め、子供の健やかな成長と五穀豊稔、豊漁を祈る。ユネスコ無形文化遺産にも登録された奇習だ。



今日の心がけ◆人それぞれの考え方を尊重しましょう

Sさん夫婦は、ともに短歌を嗜み、日々の思いを三十一音に託しています。作品を通じて心を交わす営みは、互いの内面に触れる静かな対話でもあります。妻は詠んだ短歌をSさんにメールで送ります。Sさんは表現や言葉選びについて助言をしますが、妻は多くの場合、自らの感性を尊び、原案を大切にします。一方でSさんも、投稿する短歌は必ず妻に見てもらいます。自分では気づきにくい伝わり方や表現の印象を、他者の視点で確かめたいと考えているからです。妻から提案を受けても、必ずしも受け入れるわけではありませんが、ときに心に響く意見に出合い、表現を改めることで作品がさらに深まることもあります。こうしたやり取りの中で、人の感性はそれぞれに異なり、自分の価値観がそのまま他者に通じるとは限らないと実感します。短歌に限らず、他者の視点は自分を映す鏡です。違いを認め合うことで理解が深まり、それが「皆違って皆いい」という気づきへとつながります。だからこそ、日々の関わりの中でその大切さを活かしていくことが求められるのです。

日本再発見! -秋冬の伝統行事・(日本編)-

元服式

(栃木県日光市川俣地区)

紋付羽織袴姿の若者と後見人となる夫婦が向かい合い、盃を交わす。数え年20歳の男子が、後見人を遠縁の夫婦から選び、親分と子分の関係を結ぶ。例年1月下旬に行なわれる、室町時代から続く成人式だ。川俣地区では、成人年齢は15

今日の心がけ◆指摘する際は相手に配慮しましょう

仕事を円滑に進めるためには、同僚や取引先と良好な関係を維持することが大切です。例えば間違いを指摘する際は、傷つけないような言葉を選ぶといった、相手の顔を立てることも、良い人間関係を築く上で意識したいことのひとつです。自分の思いを一方的に主張しようとすると、時には相手を傷つけてしまうこともあります。作家のデール・カーネギーは、著書の中で次のように述べています。「たとえ自分が正しく、相手が絶対に間違っているとしても、その顔をつぶすことは、相手の自尊心を傷つけるだけに終わる」。相手の顔をつぶしてしまうと、うまくコミュニケーションをとることが難しくなり、結果的に良いものを生み出すことができなくなります。誤りを指摘するのは、相手のためにも必要なことです。しかし、責めるような言い方や、思いを踏みにじるような方法では良い関係は築けません。同僚や取引先、家族に対して何かを指摘する際は、自分の姿勢や向き合い方を振り返り、周囲の人たちとのより良い関係を維持していきたいものです。

歳とされたが、昭和20年代後半から20歳に改められている。盃を交わした後は、親分と子分が五等分に切り分けた川魚を口に、血肉を分けた関係になる「尾頭付きの儀」を行なう。



今日の心がけ◆他の人の働きに心を向けましょう

信頼関係こそが、大輪の花を咲かせるような仕事を生み出すのです。

が、組織全体の成果を支えているのです。

このように、互いの働きによって組織は成り立っています。一人ひとりの働き

顔を含ませる機会の少ない人がいるでしょう。しかし、それぞれが担う仕事は確

りませんが、互いに出合うことなく、球根を通じて一つにつながっています。

彼岸花は、「葉見ず花見ず」とも称されます。秋に茎を伸ばして花を咲かせた

でも広く知られています。

秋の訪れとともに、赤や白の艶やかな花を咲かせるのが彼岸花です。

お彼岸の頃に咲く花として古くから人々に親しまれ、「曼殊沙華」という別名

今日の心がけ◆先祖に思いを向けましょう

自分が今ここにあるのは、先祖がいたからにほかなりません。代々受け継がれ

その人となりを語り伝えるのもよいでしょう。

身近なところでは、すでに他界した祖父母や曾祖父母を思い出したり、写真を見たり、両親にその人柄について聞いたりするなど、さまざまな方法があります。

また、子供や孫に、亡き祖父母や曾祖父母について、職業や美点、口癖など、

源である先祖に、意識を向けてみてはいかがでしょう。

長さがほぼ同じになる日です。太陽が真東から昇り、真西へ沈む頃に当たり、昼と夜の

日本再発見! -秋冬の伝統行事・(日本編)-

四つ辻に節分の豆 (山口県萩市)

二本の道路が十字に交差する「四つ辻」。2月3日の節分の夜、誰にも出会わないように四つ辻に行き、紙で包んだ数え年分の節分豆を背中越しに置いてくる。そのまま振り返らずに帰宅することで、厄や災いを払うという風習だ。かつては

県内各地で行なわれたというが、現在はめっきり少なくなつたという。それでも2月4日の早朝に萩市内の四つ辻では、自動車によって粉碎された節分豆が散らばる光景が見られることがある。



今日の心がけ◆備えと共有で組織力を高めましょう

業務を円滑に進めるには、起こり得る問題を想定し、備えることが重要です。十分な準備は不測の事態への対応力を高め、組織の安定運営にもつながります。しかし、どれほど備えを重ねても、予期せぬトラブルを完全に防ぐことはできません。日頃から迅速かつ適切な対応が取れる体制を整えることが大切です。実際にトラブルが発生した際は、状況を悲観することなく冷静に受け止め、まず現状を正確に把握しましょう。一人での解決が難しい場合には、上司や同僚の協力を仰ぎながら、速やかに対応策を講じることが大切です。また、解決して終わりにするのではなく、その発生原因や対応の過程を振り返り、改善点を明確にすることが、同様の問題の再発防止につながります。さらに、その知見をマニュアルや手順として共有し、組織全体の財産として蓄積することで、組織としての備えはより確かなものとなるでしょう。日頃から備えを怠らないことは、トラブル発生時の冷静で迅速な対応を可能にします。一人ひとりが備えの意識を高め、より強固な組織を築きたいものです。

日本再発見! 一秋冬の伝統行事・(日本編)-

彼岸籠もり (熊本県阿蘇地方)

先祖供養をする「お彼岸」では、一般的には、墓参りや法要を行なうが、地方によっては独自の風習も残っている。そのひとつが阿蘇地方の彼岸籠もりだ。名称の通り、春と秋のお彼岸の日に山や神社に籠るのだ。集落ごとに籠る場所は異な

予定外の出来事が、思いがけない発見につながる場合があります。九月の連休にMさんは、妻と五歳の息子と有名な避暑地へ旅行しました。高速バスで向かいましたが、高速道路の渋滞で到着が予定より二時間ほど遅れました。そのため、予定していた観光スポットを巡ることが難しくなり、ホテルのチェックイン時間も考慮して行程を変更することになりました。妻と相談した結果、近くの美術館を訪れることにしたのです。

Mさんはこれまで美術館や博物館を訪れる機会があまりなく、美術館で長時間過ごすことに大きな関心を持っていませんでした。

しかし、実際に館内を見て回ると、展示された絵画や調度品、照明に興味を引かれました。併設のカフェでも、家族とのひとときを楽しめました。

予定変更をきっかけに訪れた美術館でしたが、Mさんは新たな魅力を見ました。先入観で判断せず、実際に体験することの大切さを実感したのです。

固定観念を捨てることが成長への第一歩であり、新たな可能性を広げるのです。

今日の心がけ◆視野を広げて物事を見ましょう

り、期間や作法もさまざま。期間中、女性は交代で当番をし、持ち寄った御神酒(おみき)などの供物を供える。一方、当番以外の集落の人々は参拝したり、供えた供物を口にしたりして交流を図る。

